

座談会

社会資本の質を考える - デザインシステムの問題点と展望

佐々木 今日、お忙しいところをお集まりいただきまして、ありがとうございます。初めて顔を合わせられる方ばかりで、しかも土木のご専門の方が少なく、学会誌の特集号としては、いささか異質なメンバー構成になっております。この度の特集は、土木もデザインということにここ何年来かなり真剣に取り組んできたものの、決して状況はよくなっていないことを冷静に見据えて、そのことをさまざまな角度から、広い視野から議論しようということが主旨です。ですからこの座談会もそのような主旨にそって、皆様から読者である土木学会会員により刺激を与えていただくことを期待しておりますので、よろしくお願ひいたします。はじめにごく簡単に自己紹介をしていただければと思ひますが、私は、最初は建築を学んでおりましたが、その後、土木ご出身の先生のご指導のもとで景観の勉強しております。

中井 中井と申します。修士を出まして、3年ほど設計事務所働いた後に大学に戻ってきました。これまでにさまざまなデザインに係りましたが、その半分ぐらいは、歴史的な遺産の保全やそれにかかわる住民の反対運動があったプロジェクトで、根本的に土木のデザインは何のためにあるのだろうかということ、自分の中のテーマとして持っております。よろしくお願ひします

鈴木 鈴木でございます。専門は建築の歴史でございまして、近代以降の遺産の保存問題というようなことも勉強しております。土木自体には余り詳しくありませんが、よろしくお願ひします。

榛村 榛村でございます。私は、静岡県掛川市の市長

ですが、知らぬ間に長くなりまして6期22年になります。本業は林業でして、静岡県の森林組合連合会の会長もやっていますが、自分の町を美しい町にしたい、緑豊かな町にしたいとずっと考えてきましたので、街路樹や交通拠点となる駅やインターチェンジのデザインを、普通の田舎の町よりは神経を使ってやってきたつもりです。

矢作 矢作と申します。僕は小説家で、この席に全くふさわしくないのですが、「週刊ポスト」という雑誌に「新ニッポン百景」という連載をしております。あちこちで建築や建造物を見物して歩いておりますのでこれが縁で呼ばれたのだらうと思っています。ここで何かまともな話ができるとは思ひませんが、よろしくお願ひします。

齋藤 NHKの齋藤です。もともと社会部の記者で、昭和60年から63年まで建設省の記者クラブにいました。土木学会とのおつき合ひはその前から、コンクリート構造物の劣化問題などでかれこれ15年以上になります。今非常に関心があるのは、まちづくり、都市づくり、国づくりということです。

佐々木 ありがとうございます。本日は短い時間ですが、皆様には、インフラストラクチャーや公共性のある建造物が持っていなければならない質とは何かということをまずお伺ひしたい。そして冷静にみて現代の日本において「これは質が高い」と言えるものが多いという問題は一体どこから来るのか、この現状を打開していくためには何が必要か、ということについてそれぞれのお考えをお聞かせください。対象としてイメージされるものは、かなり建築に近いものでも、



齋藤宏保 Hiroyasu SAITO
日本放送協会 (NHK) 解説主幹



榛村純一 Junichi SHINMURA
静岡県掛川市長



鈴木博之 Hiroyuki SUZUKI
東京大学大学院教授 工学系研究科建築学専攻

純粹の土木構造物でも、あるいは都市という複合体でも結構です。まず最初に鈴木さんに、歴史的観点ということで、少し長いスパンでとらえてお話しいただけますか。

鈴木 私は、個人的にも琵琶湖疎水が大好きでして、これは日本人が近代化の中で考えた技術のなかで一番すそ野が広い仕事だったような気がするのです。そのデザインもまた見事で、南禅寺の水路閣をはじめ、トンネルの入り口部分など随所に本当にほれほれするようなデザインが施されている。これは、土木の田辺朔郎と、滋賀県の技師をしていた小原益知という建築の人と、双方が共同してデザインをまとめたらしく、あの時代の土木のデザインの質の高さが、今大変魅力的に感じられる。現在、文化庁の登録文化財の専門調査会でいろいろな資料を見せていただいています。そこに出てくる土木遺産には、すばらしい技術水準と同時に、デザイン水準を持っているものがある。

それに比べると、最近のいわゆる土木というか社会基盤施設は、建設量も多くなっているし、工期も短いからということもあるのでしょうか、ひとつひとつの個性は感じられないし、逆に妙に個性的に造ったものは嫌な感じのものが多い。ただデザインというものは樹木と同じで、できたばかりは馴染まずに時とともに落ちついてくるといった側面があるので、ここ数年の間にできたものは、まだ馴染んでいないためなのかもしれない。しかしそれにしても、やはり最近のデザインはひとつひとつの存在感が薄い。近代土木構造物のデザインは、意図的に必要以上の存在感を出さないようにしてきた面もあるのだらうと思いますが、この問題を今後どういうデザインとして展開させていくのが、個人的な興味と関心のあるところですよ。

佐々木 榎村さんは、高度成長期がほぼ終わったころに市長になられた。つまり、高度成長期でおおよそ日本の国土構造ができ、その中で地方都市がどう生き残っ

ていくかを課題として積極的にまちづくりを進めてこられたと思いますが、その一環として、駅やインターチェンジなどさまざまなモノも造ってこられた。その際そのモノに榎村さんご自身が期待していた質とはどのようなものであって、またその質を獲得するためにどのような方法をとってこられたのか、お聞かせ願えますか。

榎村 私は、いつも公共施設をつくるたびに、それが市民に親しまれたり、愛されたり、誇りになるようなものでなければいけない、しかし人口8万の小さな都市ですから、量と規模の競争はしない。質と本質的な珍しさの勝負ということをしてきたのです。

質の勝負というのは誰でもいうことですが、本質的な珍しさということをいう方は余りないのです。つまり、天守閣をつくるというのは珍しさですけれども、日本人が高度成長期につくった天守閣はみんな鉄筋コンクリートだったわけです。私は、本質的な珍しさでなければいけないから、日本で最初に木造の天守閣をつくり、大手門も木造本格復元したのです。また街路樹もたくさん植えましたが、できるだけ外来種は植えずにその地域の在来種を多様に植えてきました。特に駅通りの街路樹は、常緑3種、落葉3種、計6種類の混植です。またできるだけ昔からあるものを残すという立場で、例えば東京-大阪間で新幹線の停まる駅に木造駅舎は残っていませんけれども、掛川は木造駅舎が残してあります。

また民間活力の第3セクターでつくった東名の掛川インターは、道路公団のインターとしては502番目ですが、初めてデザインを変えてもらいました。501番目までは全部同じデザインでだれも不思議に思わなかったわけですが、私は城下町に入るインターは、やはり城下町風につくった方がいいと思って、トールゲートの屋根も初めて切妻にし、料金徴収人の入る通常赤いブースを緑にしました。この過程で道路公団と論議



矢作俊彦 Toshihiko YAHAGI
小説家



中井 祐 Yu NAKAI
東京大学大学院助手 工学系研究科社会基盤工学専攻



佐々木 葉 Yoh SASAKI
日本福祉大学助教授 情報社会科学部

したとき、公団の場合は、まず安全性、経済性、機能性を第一に考え、したがって、画一になる。それに対してうちの方は、その建物の奥にある地域性、文化性、思想性を考え、それゆえ多様性を求める、というスタイルでやってきました。

佐々木 こうしたお話は、「言うは易し、行うは難し」だと思いますが、実現するために、なにか特別新しいシステムなどをつくられたのでしょうか。

榛村 それは条例でできることは条例でやりますが、法律に反するとか、あるいは行政指導に反することもたびたびありました。そこは誤解を恐れずにいえば、政治的に市民の力が結集しているかどうかですね。つまり市民が、市長のいっていることはもっともだ、私たちも応援するからやれというような。よく地方自治体はお金も権限もないからだめだと、自ら言う人がありますけれども、そうではない。アイデアを結集する求心力が動いていれば、デザインへのこだわりや主張を通す力は出ると思います。

佐々木 齋藤さんは、「テクノパワー」という特別番組を御担当されて技術者集団とおつきあいがあり、またより広く公共事業のことを取材されておられますが、そのご経験から、質の高い公共事業はどういうものであるべきとお考えでしょうか。

齋藤 明治以降、日本は絶対的に社会資本が足りないということで、公共事業の整備は質よりも量が第一義的な目的だったのではと思います。量の不足を補うために、いつの間にかふたつの過ちを犯してしまった。ひとつはつくることが第一義的な目的になってしまった。本来は、欧米の豊かな生活水準に追いつき追い越すために使い勝手のいい社会資本をつくるのが目的であったのが、つくることが目的になってしまったということ。

もうひとつは、戦後特にそうだと思うのですが、社会資本が巨大化するにつれて、技術が暴走し始めたのではないかと。ですから、私は、今まで土木技術がその質に積極的に貢献してきたとは思えないですね。明治、大正のころにつくられた社会資本は結構いいものがありますが、これは何のためにつくるのかという目的意識がまだはっきりしていたからでしょう。

さらに、私は耐久性問題に非常に興味を持っています。この社会資本は一体だれのためにつくっているのか。今生きているわれわれの世代のためか、将来の世代のためかということを考えれば、耐久性は非常に重要になります。しかしこれに対して、社会資本は適当に壊れてもらわないとわれわれの仕事がなくなって

困る、というような声もあり、社会資本を支える産業としての誇りが失われていると感じました。今はその反省から、100年、200年もつ社会資本づくりという考え方が始まっていますが、21世紀を迎えるに当たって、何のために、だれのために社会資本をつくるのか、それをもう一度整理することが、結局は質やデザインにつながってくるのではないかと考えています。

佐々木 矢作さん、私は『新ニッポン百景』にとっても興味を覚えています。土木の方は必ずしも御存じなくて、この機会にご紹介したくてお呼びしたところもあるのです。

矢作 僕は、今日呼ばれるまでは、建築学と土木学は別のものだと知らなかった(笑)。

佐々木 一般の方の認識はそうですね。

矢作 その程度の素人なのですが、要するに、何で日本の風景としてのインフラが貧しいか、心躍らないかを考えるときによく思い出しますのは、20年ぐらい前にピニン・ファリナという自動車のデザイナーと会った時の話です。ちょうど日本の自動車の世界に進出する直前ぐらいのころですが、当時の日本の自動車は技術的にはすごく優れているけれども、何でこんなに心躍らないのか、人間の友として少しも素敵じゃないのかという話をした。「あなたのデザインの車でさえ、日本でつくるとあんなにすてきじゃないのはなぜなんだ」といったときに、彼は、日本人はどこで意思を決定しているかわからない。プレゼンテーションをするときに、だれにプレゼンテーションをしていいのかわからない。10人ぐらいどやどやとやってきて、このうちのだれが最終的に車の形を決める人なのか。ある男が、「このタイヤハウスの形がいいよ」、ある男が「ヘッドライトの形がいいよ」というと、みんなが「そうだねそうだね」といい合って、このタイヤハウスと、このヘッドライトとがくっついて、私の見ている前で、私のデザインがわけのわからないものになっていく。日本という国はすごい国だと彼がいていたんです。僕はそれをいつも思い出します。多分そうやって、デザイナーが一生懸命考えたものが、いつの間にかわけのわからないものになっていくのではないかと。

ということは、日本社会の意思決定のシステムが変わらない限りは、この国はずっとこういう余りにも心躍らない風景をつくり続けるんじゃないかなという気はしますね。

佐々木 中井さん、土木デザイナーという仕事のお話に入る前に、ご自身はどういうものに心躍り、あるいは心躍らないものはなぜかについて、いかがですか。

中 井 もともと日本の田舎の持っていた田園風景とか山の風景、そこら辺にあった川の風景、海の風景には、やはり心躍りますね。今も田舎の海辺に住んでいて、東京まで2時間近くかけて毎日通っていますけれども、もう東京に住むのはしんどい。社会基盤づくりにかかわる立場としては、一種の敗北宣言でもありますが、自分でデザインの仕事に携わりながら、どこかでデザインの持つ力を信じ切れない部分があるのかもしれない。

その原因は、市民ということだと思のです。つまり、市民からの突き上げがない。われわれが作り手の立場でいくら内部的に改革しようとしても、やはり底から突き上げてくるものがないと多分うまくいかないのだと思うのです。だから、われわれがどういうデザインがいい、悪いなどと口でいうのは簡単だけれども、それを保障してくれる市民レベル、大衆レベルで何らかのムーブメントがないと、なかなか自信が持てないと思います。

佐々木 建築は、土木に比べて、ある意味で市民にぐっと近いですね。

鈴木 民間ですから。土木は国家なり、建築は民間業者なりというイメージがあって、構造的にも全然違うところがありますね。建築の側からみると、土木には消費者がない。発注者は国であって、本来消費者は国民なんだけれども、発注者だけいてそこですべてつくられるから、あれほど気楽な世界はないと、建築の方は考えるわけです。

その点やはり建築の方は、はしたなくはなっていくけれども、競争原理が働いている。商売、例えばレストランだったら、はやらなかつたらだめなわけですから、競争が明確です。これに対して土木構造物は基本的には競争がないわけですね。だから次はあのデザイナーに頼もうなどということがない。はっきりいえば、そこが基盤の全然違うところなのではないか。その中でデザインを考えるなら、私はあえていうと、市民の力に待つというよりも、土木の担当者の理想に待つということではかないような気がします。

佐々木 建築の場合も公共建築、つまり市役所や文化ホールなどは、余り競争原理が働かないと言われますが、

鈴木 働かないかもしれない。だから公共建築はつまらないという意見がありますね。それはどやどやとグループで決めてしまう建築だからということがあると思います。ただ、あるリーダーシップを持った自治体では、非常に個性的な建物がつくられていることも事実だと思います。ですから、大きな都道府県より、小

さな市町村で個性的な建築デザインポリシーを持っているところがあったりする。

齋藤 でも、それは特例であって一般論ではないと思います。小規模な自治体がどこでも優れたものをつくってあげようという理想はありますが、現実には決してそうではありません。つまり発注者側がそもそもそういう柔軟な思考を持っていないんです。

デザインの質として何が悪いのかを私なりに考えますと、まず画一性があげられます。これは前例主義から来ています。もうひとつは効率性という問題です。さらには先述したように、何のために、だれのためにというポリシーも全く見えません。そこが非常に大きな問題で、目的なく作っているから、使い勝手もよくないし、周りの景観とも調和してきません。さらにいえば、縦割り行政です。行政組織のことだけではなく、建築だ、土木だというのも縦割りだと思ってますが、すべては部品、非常に専門分化し過ぎてしまった部品になって、トータルで物を考えることができなくなってしまった。こうしたトータルな思考の欠如の問題として、デザインとか質以前に理念的な整理をまずする必要があります、それなくして、私はデザインを追求する資格はないと思っています。

鈴木 ただ、デザインという話でいうと、僕は特にインフラストラクチャーのデザインには、ある時期、存在感がない、意識されずにスムーズに使われるのがよいという考え方があったと思います。昔だと、立派な鉄橋があって、魅力的だったけれども、ある時期、橋は道路だか橋だかわからないうちにスーツと越えられるのが大事だという発想があったのではないか。しかしまたある時期以降、少し考え方が変わってきて存在感をアピールし始めたという流れがある。

齋藤 同じく存在感をアピールした時代である明治・大正期とバブル期とで、どの時期に評価できるものがあるか。デザインの質を語るとすれば、まさにこれが問われていると思うのです。

矢作 バブルがもう少し続けば、評価するものが出てきたんじゃないかという気がするんです。バブルは惜しかったなというのが、僕の印象ですね。あと倍続けば、日本もランドデザインを持ち得たんじゃないかという気がするんです。

鈴木 せっかくのチャンスを、本当の意味でのストックに転化できなかった。

中井 そこにはちょっと異論がありまして、もともとこれは当たり前なことですけども、デザインの質は、デザイナー個人の経験や力量、考え方に負う。これは

人間がやる限り当然のことですが、もともと土木設計の、特に高度成長期のやり方とは、そういった個人の差をできるだけ封じ込めようとする。いわゆる標準設計というものです。つまり、だれがやっても同じものができるとに意義がある。そういうひとつのスタンダードを提示して、それを全国津々浦々くまなく張りめぐらすことによって、日本の国力がアップするのだという思想があったと思うんです。

これに対してバブル期は、とにかくものすごいお金が突如出てきて、ふるさと創生1億円やらで、とにかく地域のアイデンティティを表現する、つまり他とは違う何かをつくらなきゃいけないという要請が出てきたわけですが、そのときに、われわれは対応する術をもっていなかった。

仮にあのバブルがあと5年、10年続いたところで、それまで土木が培ってきた因習や体質、ものの考え方はそう簡単に転換したとは思えないのです。

今は確かに妙なものは減ってきていると思いますが、かといって、デザイン力がアップしたとは思えない。デザイナー個人の力量によって違うものができるというごく当たり前のことが、土木の世界ではいまだ通用しないわけですから。旧態依然のシステムの中で、デザイン業務も業界全体にばらまかれている面が否めない。

若手のデザイナーという立場でいえば、努力しても報われないなと思ってしまうわけですよ。実力のある人がいいものをつくる、それを社会が評価するという仕組みが全然ないものだから、若い人が仕事に魅力を感じて、デザインの世界に飛び込んでいられない。これは大変危惧すべき問題ではないか。

齋藤 矢作さんのバブルが続けばよかったという話についていいますと、本当にお金を持っていたところはいいものをつくったかもしれません。けれども、一般的には手抜きがものすごく横行しています。なぜかといいますが、土地代にものすごくお金が取られて、外見が良いけれど中身に問題があるものが作られた。それをデザインと間違えてはいけません。デザインというのは、あくまでも質が担保された上で、初めて存在するものだと思います。

矢作 僕がバブルを評価するのは、単体の建物として、あるいはある切り取った風景として、いいもののできたできないかの問題でなくて、日本人がドラスティックに意識改革ができたのではと思うからです。つまり、日本人は貧しさに甘えているような部分があると思う。我々は貧しいんだ。われわれは戦後の混乱からこま

で来たんだみたいところで、あれがもう少し続けば、例えば「成金も3代続けば名門」ということもある(笑)。もっと端的にいえば、ノブレス・オブリッジが生まれたんじゃないか。

建物を建てることに関しても、インフラをつくることに関しても、政治家にとっても、あれだけ金が回れば、そこで育った人間の意識の中から、本当の意味でのノブレス・オブリッジが生まれたんじゃないかなという気がするんです。そこから初めて何か日本が変わっていったのではないか。

榛村 今のお話は逆説的にはイエスだと思います。けれども、地方都市を預かる私には、バブルはやはり一億総不動産屋にしたとか、土地利用や人間の心をスポイルした面はものすごくあるのです。

振返ると日本は、知識や美意識のセンスまで含めて、優秀な人材はみんな都に出てしまった。向都離村です。村は貧しいままで、東京にあらゆるものが集中する。一方で、景気浮揚のために公共投資を全国にばらまくということがあったのです。農地改革によって昔の地主層は没落し、東京へ頭脳が流出してしまった結果、日本にはカントリー・ジェントルマンが育っていないのです。ヨーロッパなどへ行くと、地方に非常にきれいな風景やお城や邸宅がありますが、それはみんなカントリー・ジェントルマンが支えているんです。それが日本にはないのです。みんなデラシネになってしまいました。

佐々木 今のカントリー・ジェントルマンのお話などは、日本の社会全体のシステムが変わったスピードが速過ぎたために起こったことでしょうか。ヨーロッパでも、ある部分は急速に近代化して変化しましたが、一方で、物理的にきちんと中世の都市が姿形をもって存在し、田園風景もきちんと残っていた。それに対して、日本の近代化の過程では、これは残してこれは変えるというめりはりが一切つかなかったのでは。

鈴木 私は最近日本の近代以降の都市の歴史の本を書きましたが、日本の近代都市は、近世までのストックをほとんど使いつぶし、回転させてきたと思うのです。ちょっと荒っぽい言い方をすれば、農地解放、つまりある意味で地方を売り払うことによって、戦後の経済成長の原資を得たわけですね。あるいは規制緩和ということで、都市に残っている最終的なストックを使い回して金にするというところがあって、国土全体が本当に経済空間化されてしまっている。

僕は日本の近代化の中で、社会資本を充実させた時期は、極端にいえば、ないと思う。何かつくったよう

に見えるのは、ほとんど近世を食いつぶして転用しただけで、食いつぶすものがいよいよないという時期にきていると思うんです。

そういう視点から今後のことを考えたときに一番問題なのは、経済空間化されているという意味では全国均質だけれども、具体的に何かをコントロールするところでは、非常に細かい垣根がある。例えば建物の前の空間でも、敷地内はデザインできるけれど敷地から歩道へ、さらに駅前広場につなげようと思うと、そのデザインには全然関与させてもらえない。いいストックをつくるには、そうしたさまざまな境界をよい方向で調停する必要があって、その意味では、公共部分を担当する土木デザイナーに頑張ってもらわなくてもよくて、民間のデザイナーが土木的な部分にもしみ入っていけるようなシステムさえつくればいいのかもわからない。

齋藤 しかしそこが難しいところです。私はまだ中央官庁の方の使命感を信じていますが、一方で、市民に公共性という概念が根づいているかという疑問です。身勝手が多いと思います。

鈴木 もちろんそれは野放図に民間が公共部分にしみ入れという意味ではない。そこで僕はデザインの競争、コンペティションをやればいいのかと思う。自分の家の前の街路灯は勝手にデザインしろというのではなくて、官も民もなるべくオープンにした形でデザインを募る。橋をつくる際も、建設省が直営でつくるだけでなく、橋のデザインを募集するという形でプロセスを開いていくことがひとつだろうと思うのです。

齋藤 そのデザインコンペや市民参加をやる場合、何をもってデザインとするかということを中心に考える必要があります。例えば機能や維持管理性もデザインに入るのか、あるいは色と形だけではない五感で感じる快適性などもデザインとして考えるのか整理が必要です。今デザインというと、どうも薄っぺらな面で捉えられているように思えてなりません。

鈴木 コンペティションというのはそういうものではなくて、参加する側もいろんな専門家チームをつくるし、それを審査する側も、むしろ官庁の人もいれば各種の専門家もいる。いろいろな視点からの評価が下される。そういうのが普通のデザインコンペのシステムであって、すでに建築分野などでは確立していると思います。

齋藤 でも、だれがそれを評価するのか、そのシステムがまだできていないと私は思っています。

榛村 ここでひとつ例題を出させていただくと、掛川

では天守閣を復元した時、周辺地区は区画整理をやっていました。そこでだれがいうともなく、建物のデザインを統一して、それらしい雰囲気を出そう、お城の白と黒のモチーフに倣って、自分たちの家なり商店のファサードは全部城下町風にしよう、という声があがったのです。そしてそのための設計料に対して、建物の大小に関わらず100万円を市が補助することにして、最初17軒からスタートして、その後賛同する人が増えて50軒近くになり、あの城下町風の街並ができました。

それはだれが認めて、だれが評価したかということ、事業が進んでいくにつれて市民がお互いに認識するか、ある程度評判になると観光客が来て褒める、といった過程で、結局評価は市民自身が行ったと私は思うんです。デザインとしてはあくまで「風」なんです。佐々木 先日その城下町風まちづくりを見せていただきましたが、これはいいのか悪いのかと、悩みました。コンペの場合では、選ばれたデザイナーの意思が、最後まで貫けるような体制をきちんとつくっていかねばいけなくて、冒頭に矢作さんがおっしゃったように、いつの間にかどこかでモディファイされてしまうようなことは排除されなければならない。構造物単体として完結しているものはそうあるべきでしょうが、一方ある地域のインフラであるとか、街並のように、現実にもものが動いていくシステム自体がもう少しルーズなものに対しては、評価システムを余り厳格にしてしまうやり方は日本ではなじまないのかな、とも思いました。

鈴木 しかしインフラのデザインは、造りながら考えるということができない宿命があると思うんです。「風」というのは何で押さえるのか、色と仕上げか、大きさと形なのか、それで全然違ってしまうわけですから。だから、インフラの設計は、悪くいえば強権的に決めてしまう。

齋藤 例えばインフラをつくるときに、歩道の幅がどのくらいなきゃいけないとか、ガードレールはこういう形式にしなきゃいけないとか、とても細かい基準があります。一方、建設省が今言っているのは量から質への転換、あるいは個性ある街づくりです。その場合に、個性とは一体何かということ。私の考えでは、その地域を修飾語できちんと評価したらどうか。つまり、汚いとか、きれいだとか、心地よいとか、考えられる修飾語を全部並べて、 、 \times 、 、 をつけると、その地域の特性が浮かんできます。そうやって特性を考えたらどうかと思います。

矢 作 でも、日本の地域の特色を豊かさで計ろうとする指標、その評価基準の中身はご存じですか。カラオケボックスが幾つあるか、パチンコ屋が幾つあるかなんかが入っているんですよ。あるいは、さっき「風」とおっしゃっていたけれども、僕は「風」で一番よく思い出すのは、山口県の「山口風」です。これは何かというと、ガードレールがオレンジ色、みかんの色に塗ってあるんです。これはすごいですよ。ともかく、そういう例が全国にいくらでもあるので…。

齋 藤 だから、そういう意味でも評価手法をきちんと整理することが必要なのです。と同時に、ガードレールが必要か必要でないかという本質的な議論も、あわせて必要なんですね。つまり、根本的なことを議論していかなければだめな時代ではないか。社会資本整備が概成の時期を迎えて、ようやくそれをうまく使ってわれわれの生活を豊かなものにしていく、それができているかを点検する時代なんだと。そうすると、ここに本当にガードレールが必要なのか、生け垣があればそれでいいのではないのかといった議論のなかで、デザインを考えていくべきだろうと思うんです。

佐々木 全国各地で行われている例えば「何々風」のまちづくりでも、質はばらばらで、逆にその差が歴然としてくるところに、私は期待しています。そして頑張っている街には、それこそ人も集まるといように、ある種の競争原理が働いてくるといいと思います。しかし、それよりもカラオケボックスやパチンコ屋が多い方が豊かで住みいいという人が多ければだめなわけで、こういう問題はさかのぼっていくと、日本人の価値観、ひいては教育問題に行くのかなと思っています。

中 井 私も環境の質で住む場所を選ぶようなことが広がるといいなと思って、友達を家に呼んだりするのですが、夏の海水浴の時期は来るけれども、日常生活は皆、都市を享受したいわけで、なかなかそううまくいかないと思いますね。

矢 作 でもちょっと救いがあるのは、このまま情報ネットワーク社会が発展していけば、どこへ住むか、物理的な意味は余りなくなるでしょう。だから、あと10年、20年すれば、本当に純粋にサービス機関として地方自治体を住民が選ぶ時代が来るんじゃないかという気がしますね。

中 井 そのように前向きに考えて、では何が最終的に評価されるかということですが、先ほどから「風」という議論がありますけれども、明治以降にできた日本の近代建築も、見方によっては「風」なんですね。

「一丁ロンドン」の風景は、文字どおり「風」でした。しかしそれが今は近代化の歴史としての評価を受けている。なぜか。それはやはりそれらがストックになったという明快な評価が下がったからじゃないか。

掛川の「城下町風」でも、その新しい試みが今後50年、100年のタームでみたときに、住むということに対するストックになり得ているかが問われるのではないかと。土木でも建築でも、住む風景、住む器をいかにストックとして準備できるかというのが問われるわけであって、表面的な形の何々風とか、これは形が格好いいねというものの自体がデザインの質だというのは、短絡的な考え方だという気がします。

鈴木 「風」も残れば本物になるといわれましたが、現実には「一丁ロンドン」はすでに跡形もない。丸ビルももうない。20世紀にかなり意欲的につくってきたオフィス街を跡形もなくしてしまっている国は、世界中で日本以外にないわけですよ。なくなったのはそれらの建物がちゃちだったからではなくて、使いにくいとか、今のスタンダードではないとか、どうせ金をかけるのなら新しくしたいと理屈をつけて壊してきた。これはデザインの問題でもないし、質の問題でもない。基本的にどこかがおかしい。自分たちの造ったものをストックにしないのです。

佐々木 デザインの話をしていくと、どうしても文化論になってきて、それはそれでおもしろいのですが、やはり日本人というのはこうなんだよねということからは、次の具体的な切り口は見えない。ではどうしていったらよいかという方向で、皆さんのお立場や興味の方向から、ご自由にお話していただけるとありがたいのですが。

鈴木 私は、やはりデザインの境界をオープンにしていこうと、土木デザイン、都市デザイン、建築デザイン、造園等々の領域を、もう少し風通しをよくする。そのための行政的、法律的、技術的な変革を考えていくべきであろう。単純に言えば、そうですね。

佐々木 先ほどコンペの話もいただきまして、それについてはまたさまざまな議論をしたいのですが、少なくとも建築の世界では、コンペ論が生まれる程度にはコンペの経験がある。ただ、土木についてはほとんどそれがない。ですからまず、建築の分野におけるコンペ論を土木なりにどう取り入れるかという議論がもっとあってしかるべきだと私も思います。榛村さんいかがですか。

榛 村 地元で今、第二東名の工事をやっていますが、これはものすごい巨大土木技術です。これを、地元

とっていかに不快感や圧迫感がなく、プラスに作用するように、例えば高架下を公園化して住民生活にどういうふうマッチさせるかというのは、大きな課題なんです。パーキングエリアにしても、今までの道路施設協会の独占と違って、地元にもやらせるということですから、競争原理も働いて新しいデザインにしていこうというようになるでしょう。しかしとにかく第二東名は巨大構築物ですからそれが地域の文化と結びつくかどうかは、市町村長あるいは県知事の力量というか美意識に大いに関係してくると思います。また、沿線住民や、市民に限らず外部の専門家なども含めた応援団を集める力も大事ですし、いいものをつくろうとか、人の町よりうちの町の方がいいんだという誇りや郷土愛を持つといった市民意識の面も大事ですね。

佐々木 矢作さん、何か。

矢作 僕は、見れば見るほどこれはだめだと、日本中どこへ行ってもそう思う。

佐々木 でも、たまに褒めていらっしゃるものがありますね。

矢作 要するに、コンセプトも同じ、提言も同じ、スローガンも同じ、全部同じなんです。では、いいものと悪いものと、どこに違いがあったかと言えば、結局、そこに集った人たちの志だけです。それ以外の何物でもない。志は他動的にどうしようもないですから、それは他人の志に期待するしかない。情ないことだけれども。

例えば今おっしゃった第二東名なんて、僕にいわせれば噴飯物で、あんな矛盾だらけのものはないんじゃないかと思うんですが、あれをいいものだと思っていられっしゃる方も多い。僕は、あれが完全に完成する20年程度後に、今みたいに化石燃料を使った自動車がバンバン走っているとは思えなくて、電気自動車になっていたら時速140キロなんて相当無理だから、こんなでかいものをつくってどうするんだろうな、と思うわけです。もっとすごいのは、パーキングエリアのお話がでしたが、あそこに7階建てのホテルをつくるだの、養老院をつくるだのとまじめに考えている人達もいるみたいで、その感覚が僕には全くわからない。どうしたらいいんでしょうね。

佐々木 土木技術者からはいろいろ反論もあるでしょうが、そもそも齋藤さんがおっしゃったように、何のためにつくるのかというところを問いかける場がない。

裸の王様に対して、王様は裸じゃないのという意見をいえる場面がなさ過ぎることは、私は問題の一つだと思っています。中井さん、いかがですか。

中井 どうしても議論は、これは必要か必要じゃないか、効率的か非効率かという話になってくるんですけども、もともとそういう議論は、何らかのビジョンが示された上で、そのビジョンの理念に即してどうかというところで初めて成立すると思うんですね。では、例えば今の土木の教育で、そういうビジョンを示せるようなプランナーや政策を提言できるエンジニアを養成しているかといえば、多分していない。土木の今の発注、受注のシステム、教育のシステムを見たとき、どういう人材を欲していて、どういう人材を育てようとしているのかというのが、見えにくいのです。

実際に、われわれはこういうビジョンのもとで、こういう目的に沿ってやっている、だからそれについて意見を下さいということがない。あくまでもその場その場で、つくりますとか、いやそんなのはむだだと、押し問答をしているだけだ。この状態を何とかしないとイケない。僕はたまたま今大学にいますので、まずはやはり教育から基本的に考えていくことが、遠回りではあるけれども、一番大事なことなのかなと思います。

齋藤 私は永らくコンクリート構造物を中心に追いかけてきましたが、21世紀は、“田舎”と“土”と“木”という言葉がキーワードだと思っています。そういう意味では、土と木、そういう素材を生かしたデザインをぜひ評価してほしいし、土木学会が先頭を切って、そういう提案をしていただきたい。今私は童謡をバックアップしていますが、童謡は日本の文化として非常に素晴らしいものです。日本人はそういうものを生み出せる民族なので、必ず市民に受け入れられるデザインが21世紀には実現できると思います。そのための手がかりみたいなものをぜひ土木学会に提案してほしいと思います。

佐々木 土木学会の座談会としては異色なものとなったかとは思いますが、どうしてもクローズした世界で、与えられた命題の是非を問わずに、それを解決するテクニックに没頭するという傾向が技術者集団にはありますので、そもそも何のためにというところを考える際の刺激になったのではという気がいたします。今日はどうもありがとうございました。